
現実幻想的

羽海野渉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実幻想的

【Nコード】

N3550U

【作者名】

羽海野渉

【あらすじ】

渋谷で起こるテロ。それは過去に起きた女子高校生のケンカが発端だった。

過去の日々。

空、青空。いや、ちょっと橙色か。空は暁になりつつある、現在時刻は四時二十五分。私は腕時計を見た。私は今、河原に寝転んでいる。私の目の先には空が広がっている。雑草の先端が首筋に当たって何だか気持ちいい。川の方から船の動く音が聞こえる。

「ああ。変わらないなあ本当に十年前と。この河原はさ、この草の具合もね」

私はそう呟いた。目の先の空では鳥が飛んでいる。すると河川敷にある野球場からホームランだろうか、金属の鳴る音がする。やっぱそうだ。ボールが河川敷から私の方に飛んでくる。そのボールは私の隣の雑草に音を立てて静かに落ちた。

「あ、すいませんっ！ボール投げてくれませんか？」

一人の野球少年が私のほうに駆けて寄ってくる。私はほいと言いながら、ボールをその野球少年へと投げた。野球少年はお辞儀をしてから背を向けて、仲間へと手を振りながら野球場へと戻っていく。

そろそろ、仕事に戻らなきゃやばいよなと私は思い、立ち上がる。見ると私の着ているスーツには雑草が少しついていていた。それを私は手で取り払い伸びをする。「ふあーっああ」思わず私は声を出してしまった。欠伸も出た。

十年前の私―田内奈緒子もこの河原に寝ていたことを私は覚えている。あの時は今のように笑ってこの河原に寝てはいなかったけれど。むしろ泣いていた、いやあいつらに呆れていたと私は覚えている。

今となってはその事も笑える過去となりつつある。あの時の私とはある一人のいじめっ子によっていじめられていたんだ、と。今だったら笑いながら言えるかもしれない。

高校へ毎日通っていたあの頃。私の幼馴染は違う高校へ行き、も

う一人の幼馴染は福岡へと引っ越していったあの頃。

私は昔のことを思い出しながら、仕事場へと向かうため置いてあった車に乗る。青色のスカイラインだ。

「もうあの日は戻ってこないしね、過去は過去、今は今」

私は車のドアを開けて乗り、そして閉める。エンジンをかけて、車を走らせる。その車は風を裂く様な音を立てて河原から走り去った。

ちょっとだけ、いやあの一日だけ十年前の話をしておこう。

私こと田内奈緒子十七歳はいつもの通り学校へ向かおうと朝五時くらいに起きた。いつも通りの朝食のトーストと麦茶を私は食べて、脚力をつける為に河原を走ろうというも通り早く家を出る。

私は耳にミュージックプレイヤーのイヤホンをはめ、スニーカーを履き、バッグを持ってドアを開けた。「行つて来ます」と言つて。

私の家から数分の位置にある荒川河川敷。そこを三十分ほど走つた後高校へと向かうと丁度の時間となる。私のその前の運動テストは最悪で、クラスの中でも結構ひどかった。だから私は決めた。

今年の目標 毎日三十分以上は走るべし。守らなかったらその日の夜チョコを一つ食べることに！

女の大敵ニキビ。それを作る原因となったのは夜に甘いものを食べることに。だったらそんな嫌だからそれにしようと思つて正月に決めた。因みにその日、二月十四日月曜日時点では三十勝くらいだったと記憶している。

私は制服のまま二月の寒空の下、荒川河川敷に向かった。

二月の早朝だというのに河川敷にはこれから会社に行くだろう通勤者や、これから朝練があるであろう見るからにして運動部の少年がいた。

「早く行かないと、あの鬼顧問に怒られるぞーっ」

「あのババア、うるさいんだよねー」

「仕方ないだろ、芹沢さんだからさあー」

持っている物から見ると彼らはテニス部なのだろう。ラケットを持っている。彼ら三人は怒られないように朝練に間に合わせるためだろう、走って私の隣を駆け抜ける。ラケットがあと少しで私に当たるところだった。

そして彼らが走り去ってから私は足を止め独り言を呟いた。

「まあ、このあたりでいいか」

私は伸びや屈伸などの準備運動をその場でしてから腰を下ろし、クラウチングスタートの姿勢をとる。私は制服なのでスカートが少し捲りあがる。二月の朝の冷気にあたって少し腿が冷たい。

でも私はそんなことを気にせず、頭の中でカウントを取る。

(三、二、一、ゴーツ！)

私は走り出した。腕を振り足を上げる。私はその時何かを叫んでいたのかもしれない。私が走っていくのを河原を歩いていた人たちは変な物を見るかのような視線で見ていた。

私は荒川河川敷を高校のある方向に向かって全速力で走る。しかし、当然のことながら途中で息は上がり走る速度はだんだん遅くなって、私は立ち止まった。

膝を押さえて息を整える。すると。

突然後ろから頭へと重い衝撃が加わる。それはもう痛かった。私はすぐに座り込み頭を押さえた。そしてその衝撃が加わった方向から声がした。

「お前はバカか？制服のくせにそんな全速力で走ってスカート捲れてたぞ、お前は痴女か？通行人の人がどんな目でお前を見てたか考えろ！」

私はその声が聞こえた方向へ頭を向ける。そこには見慣れた男の顔があった。そいつの名前は霧島素哉。私の幼馴染でパソコンが得意な女にモテるような顔つきの奴だ。本当に私の友達にもコイツが好きな奴がいるくらい。但し彼女いない歴は年齢と一緒にである。

素哉は私に追ってきたのか息を上げながらそう叫んだ。周りには

私たちを見ていく通行人の目が。微かに笑っていく人までいた。だけれどその発言に私は怒り顔を赤らめ、立ち上がりこう言い返した。
「痴女じゃないって！運動テストが最悪だったから運動しようと思っただけだって！」

「だけどその行動結果がスカート捲れて、通行人が絶対見ちゃうだからな」

その瞬間私は走っていたとき通行人が何で私を見ていたのかに気づいた。叫んでいたのではなく、スカートの中が見えていたのだと。

そして、前の素哉の言葉を思い出す。スカートが捲れて、通行人が絶対見ちゃうという言葉。私はまさかと思ってこう聞き返した。

「まさか素哉、私のスカート覗いた？」

私はどんな顔をしていたかは分からないが素哉の顔を見た。左手でスカートの裾を直しながら。

「・・・見てない」

素哉は一瞬間を空けてそう答えた。顔を逸らして。

「絶対、見たでしょ！」

私は左手でスカートの裾を押さえ、右手の人差し指を素哉に向けてながら朝だというのに大声を出して反論する。

「じゃあ、今日の私の下着何色だった？」

私はこの質問を素哉へと投げかける。河川敷に流れる間。まあ見てなかったんだったらいいけど、と私が言おうと思っていたとき素哉は口を開いた。

「赤」

その言葉は素哉が私のスカートの中を見たことを示していた。

その言葉を聴いて私は少し顔を赤らめて叫んだ。

「やっぱ、見てんじゃないかっ！」

私は左手に持っていたバッグを振り回して素哉に命中させた。素哉の腹に当たり後ろへと倒れる。私は逃げ出すように走り出して学校方向へと向かった。私はちよつと行った所にある道路のところま

で走って後ろを見る。すると素哉が追いかけてきていた。

「ばーかっ」

私はそれだけの言葉を笑顔で、素哉に大声で叫んだ。

高校まであと少しという距離まで来たあたりで、私は昨日あったことを思い出していた。

クラスメートに弁当の内容が「お前がハンバーグなんて生意気なんだよ」と言われ殴られて。

「お前好きなのあいつだよな」と勝手に決め付けられ明日はバレンタインデーだからということではば強制的にチョコをあげると言われ拒否したら蹴られて。

帰りのホームルームの前に机の中を確認したら古典の教科書がなくなっていたり。結局今日まで続いているけど。

もし。いや、たとえ今日暴力を振るわれようとも、今日こそは何かをしてはねのけたい。何かはまだ決めてないけども。とにかく。今日こそは何もされない平和な日々を送りたい、と。そんなほぼ無理な約束を私は自分で決めていた。たとえすぐ出来なくてもいつかはできる。そんなことを思ってた。

そんなことを思っていたら校門まで来ていたと私は記憶している。自転車で来る人や歩いてくる人が「おはよー」とか話をしていた。

昨日のことを思い出していた私はこんなことを思っていた。

（寝たらしセツトって言葉があるんだからきつと昨日のことも改心してくれるよ、古典の教科書も元に戻してくれてあるよ）

今思うとその思っていたことはどれだけ暢気だったことか。世界のどこかでもそんなことは今でも起こってない、そんな幼稚な考えは物語の中でしか成立しない。と今私は思うのだが。

そんな暢気なことを考えていた私に後ろから一人の男の人が声を掛けてきた。私は考えるのをすぐやめて後ろを向く。そこには先輩が立っていた。

「おはよー、奈緒っち。今日も美希にヨロシクなっ」

名前は及川篤。この高校の先輩で陸上部（ちなみに私は帰宅部）で金メダルに最も近い男とまで高校陸上界では呼ばれているらしい。で、美希というのは先輩のいとこ、まあ養子縁組でそうされているだけの妹である。私は美希とはクラスメートだった。

そして先輩は私の近くに顔をやりこう呟いた。

そう。この先輩の残念な点は。

「あ、でも美希とイチャイチャするなよ？その時点で俺がお前射殺するからな？じゃなっ」

極度のシスコンということ。妹の美希も極度のブラコンなので私の頭の中では何度も二人が如何わしい事をしてるんじゃないか説が立ち上がっていた。

先輩はそう告げてから自転車で校内へと駆けて行った。私はほぼ毎日先輩に会ってから溜息をついている。私はその日も溜息をついた。

私は少し肩を落とし、もう一度溜息をついてから学校へと足を入れた。ほぼ無理な約束を実行しようとして。

校庭を歩いて抜けて昇降口へと足を入れる。昇降口にはいつもと違い、髪や制服を整えた男子たちがカッコつけて話をしていた。そんなにチヨコが欲しいか男共。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3550u/>

現実幻想的

2011年6月25日20時10分発行